

生徒会室。三密を防ぐために、広く間隔をあけた机の配置。

ホワイトボードには「アンケート結果」と大きく書かれた紙。

5月下旬。夏服への移行期間だが、なんだかもう夏の様相である。

そこに、「エヴァンゲリオン」登場人物である、「碓ゲンドウ」と「冬月コウジウ」に扮した生徒会長の横山柊人と藤林樹がしっかりと前を見据えている。

開幕

樹「ぬるいな。」

柊人「ああ。」

柊人「この度、二〇二〇年六月二十七日（土）に公開を予定しております

た、『シン・エヴァンゲリオン劇場版』につきまして公開日の延期を決定いたしました。楽しみにしていたいただいている皆様へ、このようなご報告となりましたこと、深くお詫び申し上げます。」

樹「やはり最後の敵は同じ人間だったな。」

柊人「すべてはゼーレのシナリオ通りだ。」

柊人「つてかさ、みんな騒ぎすぎ。」

樹「本物のエヴァオタはさ、みんな分かっているんだって。」

二人「庵野はまだ映画を完成させていない。」

柊人「時間稼ぎだろ？今まで何回そのパターンだったんだっの。」

樹「おやおや、まるで二五年間も生きる「エヴァオタ」であるかのような発言。」

柊人「ち、ち、ち、樹君。ファンに、年数何て関係ないよ。」

樹「カッコイイー一生ついていきます！」

柊人「冬月、俺と一緒に人類の新たな歴史を作らないか？」

樹「しっかし、いつになるかねえ、公開。」

柊人「いいところ、来年の春じゃね？」

樹「やっぱそこまで延ばすか。」

柊人「だって、ゼツタイ徹夜組とか出るしさ、映画館の人数制限しても無理でしょー。『三密』ですから。」

樹「でも、来年の春ということは、大学生ですよ。」

柊人「ワンチャン、彼女と観に行ったりとかあ？」

樹「それは、無理かな。」

柊人「無理？今、無理と言いましたな樹くん？」

樹「え？何それ？」

柊人「無理ということは、それすなわち、樹くんには好きな人がいることだよねえ。」

樹「なっ！何をいきなり！？？」

柊人「素直じゃないなあ？誰だい？僕の知っている人かい？まさか、この生徒会の中ってわけじゃないだろうねえ？」

樹「まさかあ？そんなわけないじゃん。」

柊人「じいー。」

樹に近づいていく柊人

樹「やめてよ、柊人君！近い！近いって！ソーシャルディスタンス！！」

柊人「まあ、すべてはコロナのせいだけだね。」

樹「しかし、暑くね？」

柊人「まだ5月よ？」

樹「地球温暖化は確実に進んでますなあ。」

柊人「お！さすが！S大理工学部地球防災学科をご志望の樹さん。」

樹「ま、一応ね。」

あすみ登場

あすみ「あつっー！」

柊人「今窓開けたから。」

あすみ「ハア？あんたたち先に行くって言ったじゃん？」

柊人「うん。まあ、いろいろ忙しくて。」

樹「そっ！そう！いろいろあるんだよ。男の世界には。」

あすみ「…ふーん。」

柊人「あれ？萌瑛乃は？」

「萌瑛乃」に激しく反応する樹

あすみ「…面…談。」

樹「どどどどうする？待つ？」

柊人「いや、時間ないっしょ。実際、分散登校でさ、学校来てんのうちら3年だけだし。」

あすみ「あーホント、コロナのせいでもできないし！」

柊人「しょうがないじゃん。人類の歴史はウイルスとの戦いなんだよ。」

中世ヨーロッパで人口の3分の1が死亡したと言われるペスト、

世界で5億人が感染したスペイン風邪。エボラ出血熱にエイズ！」

あすみ「でも、今じゃなくてよくない？千年に一度の大震災とか、百年

に一度のウイルスとか、どんだけ当たり年なの？」

樹「はいはい。じゃあ、とりあえず3人で作業しますか。」

あすみ「はい。アンケート集まってんの？」

柊人「1, 2年が昨日までのやつは回収してきた。」

あすみ「3年は？」

樹「3年のは預かってる。」

あすみ「どんな感じ？」

樹「え？見てない。」

あすみ「えー気になんないの？」

樹「まあ、多少気にはなるけど…」

あすみ「確認だけどさ、「文化祭と校内スポーツ大会の開催是非」についてのアンケートは、これで全校生徒の意見が出揃いました、今から集計します、結果出ます、で？そのあとは？」

柊人「先生に報告します、来週の火曜日に先生が運営委員会にかけます、

で金曜日の職員会議にかけます、で決定らしい。」

あすみ「ふーん。じゃあ、今月中には決着つくんだ。」

樹「あ、今日、結果出たらリモート会議だよ。」

あすみ「リモート会議？」

樹「いくつかの文化部がさ、結果出たらすぐ教えてほしいって。だから、

今日の4時にLINE電話するって。」

柊人「4時っていった？俺今見てるから2年やるわ。」

あすみ「うち3年見たいから、やりたい！」

樹「いいよ。じゃあ、1年やるから。」

3人 それぞれ集計作業に入る。

あすみ「そういえばさ、柊人達ってもう引退したの？」

柊人「まあ。」

あすみ「弓道はさ、代替試合あんの？」

柊人「ないよ。」

あすみ「ふーん。なんか切な。」

樹「弓道って隣の人と間隔開けられないし、横並びとはいえ結構長い時間その場にいるからね。」

柗人「あーあ、俺さあの桜の木の下でさ、射るの好きだったんだよ。で

も、今年は休校中に桜散っちゃって、それが叶わないまま終わっちゃったんだよね。確かに、弱小弓道部だからさ、大会出たところで勝てないのみんな分かってるから、そんなに高校総体なくなつたことについては喪失感みたいなのはないんだけど。な？」

樹「うん。まあね。でも、本当にきれいなんだよ。弓道場の桜。」

あすみ「そっか。」

柗人「あすみんどこは？」

あすみ「テニス？やるよ。」

樹「やるんだ。」

柗人「いつ？」

あすみ「来月の半ばくらい？」

樹「期末考査の直前じゃん。」

あすみ「そーなんだって！ヤバイよね！」

樹「早いとこだと、もう平常講習始まつてるらしいよ。」

あすみ「マジ？」

柗人「俺等もさあ、いつもだったら生徒会の仕事自体、2年に引き継い

で文化祭の運営の第一線からは退く訳じゃん？でも、今年はさす

がに、全面的に協力してあげないとマジよなあ。」

あすみ「ねえ、文化センターでやるってなったら、何やんの？」

柗人「文化発表会的な？吹奏楽と演劇とか発表して、あとクラスパフォ

ーマンズして終わり。」

あすみ「それってさ、いつも通りやれるの？」

樹「マスクつけないきやだめなんでしょ？」

あすみ「いやいや、マスクしてダンスしろっていうの？」

柗人「あと、ソーシャルディスタンス守ってね。」

あすみ「2m？」

柗人「うん。」

あすみ「無理じゃない？ステージに何人乗れるのよ？」

樹「気になって調べてみたんだけど、十人くらいだった。」

あすみ「十人！？」

柗人「まあ、全員一斉に出るんじゃないなくて分散すればいいからね。」

あすみ「校内祭でさ、学校のステージ使っちゃダメなの？」

柗人「ダメだつて〜ワンチャン駐車場でやるっていう手はあるけど、雨

降ったらどうすんのさつて話。」

あすみ「模擬店もだめなんでしょ？最後に売りまくりたかったなあ〜」

樹「N高はさ、中止だつて。」

あすみ「は！？文化祭？」

樹「アンケート取ったら、中止が多かつたんだつて。」

あすみ「やっぱ進学校は意識高すぎ高杉君だわ。」

柗人「2年はやっぱ校内祭の希望多いな。」

あすみ「だつて、2年はいじじゃん。基本的に去年と同じことできるし。」

柗人「まあ、そうなんだけどさ。つてか7月までいったら、もうコロナ

終わってるんじゃない？」

あすみ「あつなんかネットのニュースであつたけどさ、紫外線に弱いカ

もしれないつてあつたよ。」

柗人「あとさ、あとさ、日本って梅雨あるじゃん？基本的にウイルスは

湿気が多いと生きられないから、コロナ終わるつても見た！」

あすみ「うちもそれ見たー！」

柗人「5月って超微妙じゃね？」

あすみ「わかるーもうちょっと待ったらさ、文化祭もスポーツ大会も普

通にやれますーってなるかもよ？」

柗人「アンケート意味なかったー！なんつて！」

あすみ「この暑苦しいマスクとも、よーやくお別れできるかも！日焼け

したら、ヤッバ！！って思ってたんだよね！」

柊人「海だ！山だ！フェスだ！！！」

あすみ「夏が私を待ってる！！！」

樹「はいはい、集中。終わらないよ？あと、うちら受験生。」

柊人・あすみ「はい……」

樹「夏休みは、夏季講習。」

柊人・あすみ「……はい……」

少しは静かに作業する

柊人「萌瑛乃、遅くない？」

樹「……人生いろいろですよ。」

あすみ「なんじゃそりゃ。……あつ……忘れてた。」

柊人「何を？」

あすみ「柊人、ブッチ先生に呼ばれてる。」

柊人「は？早く行ってよ？いつ？」

あすみ「すぐ言ったほうがいいかも」

柊人「おいおい、マジかよ！」

あすみ「職員室にいるって。」

柊人「あーもう俺が怒られんじゃん！」

あすみ「ごめんごめん。」

樹「がんばー。」

柊人「じゃあ、二人で頑張ってる。行ってくる。」

あすみ・樹「いってらー。」

柊人 退室

しばし作業を続ける二人

あすみ「ちよつと。」

樹「どうしたの？」

あすみ「3年、中止多すぎるんだけど。」

樹「……仕方ないんじゃない。みんな早めに気持ち切り替えたってこと

なんじゃないの？」

あすみ「でもさ、文化祭だよ？高校最後の文化祭だよ？」

樹「模擬店出来ないって言われたら、じゃあなくてもいいっちゃって人、

多いんじゃない？」

あすみ「クラスパフォーマンスもあるじゃん？」

樹「他のクラスはどうかわかんないけど、クラパ嫌がる人もいるからね。」

あすみ「べつに全員ステージに出なくていいんだからさ、適当に裏方

でもやればいいじゃん。どーせこういう人たちってさ、コ

ロナじゃなくても中止になればいいって思ってる陰キャでし

よ？腹立つ。」

樹「あすみは、文化祭やりたいの？」

あすみ「当たり前じゃん！遠足も中止、最後の高校総体も中止、これで

文化祭も中止だったらさ、かわいそすぎない？うちら。」

樹「でも、行きたい大学に行けないほうが嫌じゃない？」

あすみ「たかだか、文化祭期間中の準備なんて1週間じゃん？その1週

間、多少勉強ができなかったとして、それが受験に大きく響く

と思う？私は関係ないと思うけどな。」

樹「まあ、考え方はひとそれぞれだからね。」

あすみ「樹も中止に○したの？」

樹「それは……」

萌瑛乃が入ってくる

萌瑛乃「お疲れ。」

あすみ「萌瑛乃ー遅かったじゃん！」

萌瑛乃「ごめんごめん。面談長引いて。集計中？」

あすみ「柊人が先生に呼ばれちゃって。そのまま柊人のところに入ってよ。」

萌瑛乃「いいよ。どこやればいい？」

樹「2年生で、お、お願いします。」

萌瑛乃「OK。」

あすみ「面談、どうだった？」

萌瑛乃「まあ、普通かな。」

あすみ「萌瑛乃ってさ、大学どこ行くの？」

萌瑛乃「今んとこ、H大の看護。」

あすみ「マジ？やっぱ頭いい人は違うなあ。」

萌瑛乃「でも、C判定だし。」

あすみ「で、推薦やるの？」

萌瑛乃「やるつもりでいる。あすみは？」

あすみ「うちも！推薦！」

樹「どこ行くの？」

あすみ「K大！」

樹「え？文転すんの？」

あすみ「うん。じゃないと、行ける大学ないし。」

萌瑛乃「藤林君は？」

樹「え？あの、その、S大に…」

あすみ「マジ？何判定なの？」

樹「一応、Bだけど…」

あすみ「すごー！」

萌瑛乃「すごいね。藤林君。お互い、頑張ろうね。」

作業を進める3人

あすみ「ヤバイ！」

萌瑛乃「どうしたの？」

あすみ「今んとこさ、文化センター29、校内祭29、中止20なんだけど。」

萌瑛乃「2年生は、文化センターよりも校内祭のほうが多い感じ。」

樹「1年はクラスによって差があるな。」

あすみ「校内スポーツ大会は？」

萌瑛乃「こっちは、規模縮小で7月に1日が多いかな。」

樹「こっちもそんな感じ。」

あすみ「じゃあ、スポ大の方はあんまりブレてないんだ。」

樹「ただ、運動会と合同するのもそれなりにいるけどね。」

萌瑛乃「あと、中止もね。」

樹「運動苦手な人は中止にしたいだろうね。」

萌瑛乃「さすがに、競技中のマスクいいよね？」

あすみ「無理無理！バスケとかマスクしたら死ぬよ？」

樹「あつ、そっか。7月だと熱中症対策もしなきゃだね。」

萌瑛乃「問題山積みだね。さて、どうなることやら…」

柊人帰ってくる

萌瑛乃「おかえり。」

柊人「…」

樹「どうした？」

柊人（大きなため息）

萌瑛乃「何かあった？」

柊人「文化祭は、文化センターに決定〜！」

萌瑛乃「え？どういうこと？」

柊人「校内祭は密になる危険性が高いから無理だって。」

萌瑛乃「なにそれ？」

柊人「文化センターはさ、うちの全校生徒457人に対して会場のキャパ1105

席だから収容人数が50%切るからいいんだと。一方向しか向かないし。」

あすみ「まあ、確かにそうなんだけどさ、うちの意見は無視なの？」

柊人『「これが、君たちの為に考えた結果だ」って。」

萌瑛乃「でもまだ、決まったわけじゃないんですよ。」

柊人「もし仮によ、アンケートの結果、校内祭が圧倒的に数が多かったとして、『はい、これが生徒の意見です』って持っていてもさ、

職員会議の結果、文化センターでしたあって持っていかれるんだ

よ。絶対。」

あすみ「じゃあさ、スポ大は？」

柊人「…中止だって。」

あすみ「ハアアア？中止！？」

樹「理由は？」

柊人「三密防げないでしょ？って。バスケットは接触する可能性あり。応援

は大声出すし、ハイタッチとかハグとかしちゃうでしょ？だって。」

あすみ「体育でふつうにバスケットやってんじゃない？なんで授業は良くて

行事はダメなの？」

柊人「俺もそこはおかしいと思うよ。しかもさ、終業式はフツーに体育

館でやるんだって。」

樹「全校生徒？」

柊人「うん。」

樹「体育館に全校生徒入れるの？」

柊人「うん。」

あすみ「じゃあ、スポ大やっていいじゃん！」

萌瑛乃「あすみ、落ち着いて。」

あすみ「これが、落ち着いていられる？生徒会は何のためにあるのよ！」

柊人「俺もさなんか、一気にやる気なくなってきた。もういつそどっち

も中止でいいんじゃない？って思ってきた。」

あすみ「アンケート取ったのにおかしいじゃん！」

柊人「まあ、まだ本決まりではないと思うけどさ、さすがに。」

萌瑛乃「…私も中止も仕方ないんじゃないかって思う。もういつそ、

受験に全部切り替えたほうがいいんじゃないかって思う。」

あすみ「萌瑛乃まで！」

樹「仕方ないよ。コロナだし。」

あすみ「なんでもさ、コロナのせい、コロナのせいって言わないでよ。」

柊人「…だって、どうにもならないじゃん。」

あすみ「私は納得できない！誰のための文化祭なの？誰のためのスポー

ツ大会なの？私たちの気持ちは？意見は？何言っても変わらないな

いの？」

柊人「言ったところで何になるって言うんだよ。」

樹「柊人！」

あすみ「…あんたはすぐそうやって逃げるもんね。」

一同に重苦しい沈黙

あすみ「直談判に行こう。」

樹「え？どこに？」

あすみ「校長室。職員室でもいいや。」

柊人「おいおい、ちょっと待てよ。それはやめとこ。」

あすみ「別に喧嘩しに行くわけじゃないよ。うちの思いをさ、わかっ

てもらいたいじゃん。」

柊人「子供みたいな真似すんなよ。」

あすみ「まだ一八歳です！子供ですう！」

柊人「俺らさ、もうすぐ大人だよ。」

一同、再び重苦しい沈黙

あすみ「樹は、どう思ってるの？」

樹「え？ええと…あの、その…あんまり先生たちと角立てたくないって

いうか…」

あすみ「萌瑛乃は？」

萌瑛乃「あすみの気持ちはすごくよくわかる。でも、今感情的になって

乗り込んでも、状況は変わらないんじゃないかな？」

あすみ「なによ。みんな。全員大人の言いなりじゃん。」

柊人「どうせ、何も変わんねえよ。」

あすみ「(ぬいぐるみを投げつけ) バカ柊人！！」

萌瑛乃「あすみ！」

あすみ、飛び出す

遠くで雷が鳴っている

柊人「今の、完全アスカのセリフだわ。」

萌瑛乃「私、探してくる！」

柊人「待って！」

萌瑛乃「なんで？」

柊人「いや、今、萌瑛乃に抜けられると…集計終わらない。」

萌瑛乃「今更！？もうアンケート集計したって意味ないじゃん！？」

柊人「そうなんだけど、さ、今更なんだけど、ブッチ先生が一応結果教

えてってさつき言ってたんだよね。」

萌瑛乃「でも、放っておけないでしょ？」

柊人「その、なんていうかさ、ホラ女子ってさ、こういうときさ……長

いじゃん？」

萌瑛乃「何が？」

柊人「ええと、その、慰めるのとか？」

萌瑛乃「これだから、男子って。女の子がなんでこうやって飛び出すか

わかる？」

柊人「アイドunno。」

萌瑛乃「追いかけてほしいの！追いかけてほしからなくなるの！」

柊人「え？そうなの？」

萌瑛乃「なるべくすぐ戻るから。」

柊人「いやあ、でも…その集計2人しか…」

萌瑛乃「男なら！黙ってやる！」

萌瑛乃、あすみを追いかけて退場

再び遠くで雷が鳴ってる

だんだんと暗くなっていく空

柊人「俺一生、女心わからない気がする。」

樹「俺も。」

柊人「子供の駄々に付き合っている暇はない。」

樹「碓、本当にこれでいいんだな。」

柊人「すべては心の中だ。今はそれでいい。」

樹「ヒトの心が世界を乱すか。」

柊人「…ってかさ、樹。お前、萌瑛乃のこと好きだろ？」

樹「ハアアアアアア？ちげええええし！」

柊人「わかりやすいまでの動揺だな。」

樹「なんだよ急に！何言いだすんだよ！碓。」

柊人「いろいろごっちゃになってるぞ！」

樹「べっべつに、好きとか、そんなんじゃないし、ただの生徒会役員だし。」

柊人「ふはははは！引つかかったな！」

樹「何がだよ！！」

柊人「俺は、前から気になってたんだよ。お前さんの萌瑛乃を見る『目』。」

樹「目？」

柊人「ありや、完全にストーカーの目だ。」

樹「おいおい！どういうことだよ！ストーカーってなんだよ！」

柊人「お前、わかりやすいくらい、萌瑛乃のこと目で追ってるよな。」

樹「そんな！」

柊人「っていうのは嘘です。あすみがさ、前から女の直感♥って言って

たんだよ。だから、カマかけてみた。」

樹「今？このタイミングで??」

柊人「いつ告白すんの？文化祭とか？」

樹「ハアア？何言ってるのお前！？告白とかマジ意味わかんないんです

けどお。」

柊人「じゃあ、片思いのまままで終わるの？」

樹「うつうるさいな！俺のことは放っておいてくれよ！」

柊人「こーいーしちゃったんだ多分気付いてないでしょー星のよーるね

がーいこめってチェリーボーイ！」

樹「汚すな。」

柊人「僕ちゃんが愛のキューピットになってもいいんだよ。弓道部だけに

ね！キヤー！！！」

樹「やめろよ！」

生徒会室を走り回る柊人

追いかける樹

だんだん近づく雷

柊人「キヤーそんなに怒らないでえ♥」

樹「柊人くんさあ、そういうとこだよ！」

柊人「樹くんはあ、萌瑛乃さんの、どこが好きになったんですか？」

そこへ演劇部部长、栄川ひかりが現れる。

しかし、男子二人の戯れを目撃し、入るには入れないでいる

樹「え？いや、あの、って！柊人くん！」

ひかり「あの一」

柊人「キヤーこわい♥」

ひかり「あの一」

男子「うわー！！！」

ひかり「声、掛けたんですけど。」

柊人「そう、なの？ええと、今取り込み中で、」

ひかり「なんの取り込み中ですか？」

男子「いやあ、あの、その、ねえ？」

ひかり「暗がりです男子が二人きり。そういうご関係ですか？」

柊人「なわけないじゃん！ちゃんと女好きだよ。」

ひかり「それはそれで今のご時世、問題発言かと。」

樹「電気、つけようか？」

柊人「うん。そうだね。そうしよう。」

樹、電氣をつける

ひかり「あの、」

樹「あーちょっと待って！今、生徒会室も三密回避の一環として、人の出入り制限してて、」

ひかり「そんなこと言ったって、あなたたちも十分密ってたじゃないですか！」

ひかり「それに二人しかいないんだから、私が入ってもよくないですか？」

柊人「まあ、うん、そうなんだけど、決まりは決まりだから。」

ひかり「……………」

樹「演劇部部長の栄川さんだよな？」

ひかり「(頷いて) 生徒会にお話があります。」

柊人「何？」

部の発表をマスクを着けてやれと。」

柊人「そう…:ですね。」

ひかり「あと、舞台上での三密を防ぐためにソーシャルディスタンスの

距離を守ってやれと。」

柊人「うん。そうなんですよ。」

ひかり「無理ですよ。」

柊人「うーん。どうなんですよ。」

ひかり「はっきり言って無理です。演劇って会話なんですよ。舞台上に

生きた人間が、お互いに会話したり動いたりして、一つの世界を表現するものなんです。口の動きも含めて演技なんです。それをマスクで覆うなんて、演劇部に死ねって言うてるような

もんですよ！」

柊人「いやあ、その、ねえ、死ねとは言っていないよ？」

ひかり「それに、距離もです。あなた、誰かと2 m越しに話しますか？

今ちようど、あなたと私の距離感くらいですけど、こんな話し方しないですよ。」

柊人「まあ、ね、」

ひかり「この件については、すでに吹奏楽部部長の奈良さんと評議会委

員長の橘さんにも伝えてあります。」

樹「二人ともなんて？」

ひかり「おいマジ、ぶっ(ピー)って。」

男子二人、死んだふり

ひかり「ちよつと！」

柊人「参ったなあ、君ねえ、なんで言っちゃったの？」

ひかり「いづれわかることですから。あと、茶華道部部長の杉森さんも

質問があるからリモート出るって言っていました。」

柊人「ああそう。なんかATフィールド全開にしたい。」

ひかり「何て言いました？」

柊人「いや、なんでも。」

ひかり「この件について、率直に生徒会ではどのように考えているんで

すか？」

柊人「って、言われても…:うちらが提案したわけじゃないし…:」

ひかり「チャーーーンズ！」

ひかり生徒会室に入ってくる

ひかり「(3年の集計用紙を見て)…:拮抗してますね。ん？あの、よろしいですか？」

柊人「今度は何？」

ひかり「これ、おかしくないですか？」

柊人「何が？」

ひかり「私、1組なんですけど、中止こんなに多くなかったですよ？」

柊人「はい？」

ひかり「うちら生徒会に出す前にこっそり数かぞえたんです。皆がどう

思ってるのか気になって。」

柊人「で、うちらが集計してるのと合わないって？」

ひかり「はい。うっすら、消しゴムで消した跡があります。…これ、誰

かが票を操作してるんじゃないですか？」

樹「おいおい、まさか、そんなわけないじゃん！」

ひかり「でも、ほら、見てください。これも、これも、一回消して中止

に○ついてますよね？」

樹「集めてから、やっぱ中止にしたいって言って直したんじゃない？」

ひかり「今まだ席替えてないんで、前から順に数えて22番目が私です。

私は、文化センター案にしました。もし、これが違ってたらや

っぱり改ざんされてるってことですよ？」

柊人「疑いすぎじゃない？」

ひかり「いいえ。じゃあ、数えますよ？」

みんなの前22枚数える

ひかり「…21、22…中止に○…」

雷がもうすぐそこまで来ている

樹「前後違うってことは？」

ひかり「一応、23番目の人も見ますか？…中止。」

柊人「おいおい、マジかよ。」

ひかり「やっぱり。」

柊人「誰がこんな事してんの？」

ひかり「文化祭を中止にしたい誰かじゃないですか？」

柊人「とりあえず、3年生だけでも集計してみない？他のクラスも全部。」

ひかり「そうですね。あの、手伝ってもいいですか？」

柊人「そうしてもらえると助かるよ。なにせ人手不足だからね。」

樹「……」

三人で分散して3年生の集計を行う。

ひかり「でました。文化センター34、校内祭41、中止82。」

柊人「中止82？ありえない！」

ひかり「やっぱり。でも、いくら3年生が中止の数が多いにしても他に

1, 2年が中止以外を選択したら、こんなことしたって意味ないのに。」

柊人「そこなんだよなあ。悪戯にしちや意味わかんないし、どうせなら

3学年分書き直さないと意味ないんだよ。」

ひかり「これ、どうやってここに集められたんですか？」

柊人「ええと、これは樹が…全クラス分を集めて来て…ってまさか？ん

なわけないよな？」

樹「……。」

柊人「って、おい、なんか言えよ。」

樹「……。」

柊人「お前に限って、こういうことするはずないよな？そうだよ、お前がこういう大胆なことできるはずねえよ。」

樹「違う！俺がやったんだ。」

柊人「嘘だろ？生徒会が不正行為だなんて。」

ひかり「女。」

柊人「へ？」

ひかり「サスペンスでこういう場合、女が従順な男を唆して、罪を擦り

付けようと…」

柊人「え？ということは？萌…」

樹「うわあああああ！」

樹 アンケートを床にばらまく

柊人のスマートフォンが鳴る

ひかり「きゃー！ー！」

柊人「おい！樹！何やってんだよ！」

ひかり「鳴ってますけど!？」

柊人「今この状況下で無理でしょ!？」

ひかり「でも!！」

柊人「でもって言われてもさ、どーすんのよ!？」

ひかり「だって!！」

柊人の着信音が切れる

柊人「あつ…切れた。クソっ！まったく誰だよ！こんな時に!！」

今度はひかりのスマートフォンが鳴り出す

ひかり「え？私!??んもう!!誰!??」

仕方なく電話を取る（スピーカー）ひかり

は音響処理

ひかり「んもう!!はい!！」

奈良「ねえ、柊人出ないんだけど?」

ひかり「今取り込んでて…」

樹「どういうこと?ひかり、柊人と一緒にいるの?」

ひかり「うん、そうなんだけど、」

奈良「ちよつと柊人聞いている?時間だよ!時間!」

柊人「わーってるよ!でも、今それどころじゃないんだって…」

杉森「ちよつと意味わかんないんだけど。」

樹「ねえ、何かあった?」

ひかり「ええと、うんと、あとで!あとでまたかけ直して!」

樹「わかった。じゃあ、あとでまたかけ直すね。」

一方的にリモート切れる

柊人「なあ、樹。なんでこんなことしたんだよ?」

樹「…それは、言えない。」

柊人「はあ?なんでだよ?」

バラバラになったアンケートを拾い集める樹

樹「…もう中止でいいじゃん。」

ひかり「え?」

そこへ萌瑛乃が戻ってくるが、扉から様子を見ている

樹「落ちたらさ、就職なんだよ。落ちたら、就職だって。あると思うか？
仕事なんて……あるわけないだろ？じゃあ、どうすんだよ？どうなるんだよ？だから、勉強しなくちゃいけないって。そう、言ってたんだよ……」

突然、けたたましい音の落雷

ひかり「きゃー！」

柊人「え？雷？」

ひかり「停電？」

柊人「やべ！窓！」

急いで窓を閉める柊人

萌瑛乃「藤林君。もういいよ。」

樹「萌瑛乃さん？」

萌瑛乃「藤林君は悪くないの。」

少しの沈黙

萌瑛乃「私がお願いしたの。藤林君に。」

柊人「マジで言ってるの？」

△回想▽

萌瑛乃「藤林君。」

樹「な、なななんだい？萌瑛乃さん。」

萌瑛乃「急に呼び出してごめんね。」

樹「いや、別に、お、おなじ生徒会じゃないか。」

萌瑛乃「そうだよね！べ、べつにそういうんじゃないもんね。」

樹「え？」

萌瑛乃「実は、藤林君にお・ね・が・いがあるの。」

樹「おおおおおね、おねがい？」

萌瑛乃「藤林君しかいないの。萌瑛乃のおねがい、きいてく・れ・る？」

樹「あつ当たり前じゃないか！男として、その、女子の頼みは断れないし！」

萌瑛乃「ありがとう！やつぱり藤林君は頼りになるなあ。」

樹「いや、それほどでも。」

萌瑛乃「お願いっていうのはね、（耳に内緒話）」

樹「へ？いや、あの、それって、」

萌瑛乃「……私ね、ゼツタイ国公立の大学じゃないとダメなの。」

樹「え？」

萌瑛乃「親に言われているの。私立は無理。浪人はできない。落ちたら就職だって。」

樹「それって、あの、コ罗纳のせい？」

萌瑛乃「お金ないの、うち、兄弟も多いし。でも、私、夢を捨てたくないの。勉強しなくちゃいけないの。なりふり構ってられないの。」

藤林君だから、お願い。」

樹「……わかったよ。萌瑛乃さん。」

いつの間にか雨は止んでいる

ひかり「あつ、電気ついた。」

柊人「ひどくね？お前、樹の気持ち弄んだのかよ？」

樹「萌瑛乃さんは悪くない！」

柊人「樹、まだそんなこと言ってる……」

樹「じゃあ、聞くけどさ、文化祭も、スポーツ大会も本当にやれるの？」

もし、うちの学校からコロナが出たらどうすんの？」

柊人「そんなこと言ったって、こっちはさ全然、感染した人出てないじ

ゃん。」

樹「でも、実際に東京では毎日毎日感染が報告されてる。芸能人だって

コロナで死んでる。本当に？やっつていいの？」

柊人「……」

あすみ生徒会室に入ってくる

あすみ「あーあー」

萌瑛乃「あすみ！」

あすみ「やっぱ無理か。」

柊人「今までどこ行ってたんだよ。」

あすみ「なんで、うちらなんだろうね。」

萌瑛乃「え？」

あすみ「千年に一度の大震災とか、百年に一度のウイルスとか、五〇年

に一度の台風とか、センター試験から大学共通テストに変更と

かさ、うちら、なんか悪いことした？」

柊人「どうしたんだよ？」

あすみ「クラスTシャツ、作れないんだって。」

萌瑛乃「え？」

あすみ「今年は、コロナのせいで行事やれるか分かんないから、作らせ

ないんだって。」

柊人「それ、誰から聞いた？」

あすみ「うち、やっぱり納得できなくて、ブッチ先生に話聞いてもらお

うと思つて職員室行ったらさ、先生達が話してるの聞いてちゃっ

て。」

樹「それともう決定事項なの？」

あすみ「あーあー楽しみにしてたんだけどなあ。また、うちの意見は

無視か。」

柊人「あすみ、俺がブッチ先生に確認に……」

あすみ「クラTなんてパジャマにもなんないってさ。ひどくない？うち

らにとつたら青春なのにさ。」

柊人「お前の気持ちは分かったから。だから、もうこれ以上……」

あすみ「あつ！分かった！日頃の行いが悪いからだ！いっつも数学とか

赤点だからかあ〜」

柊人「あすみ、もう、いいって！」

あすみ「……本当は今頃、普通に部活して普通に来週高校総体で、普通

に引退して、普通に遠足行ってバーベキューして、普通に文化

祭で模擬店もクラパも盛り上がって、クラT着て、スポ大で声

枯れるまで応援してさ……なんで、うちらなの？なんで今なの？」

柊人「落ち着けよ。」

あすみ「落ち着いてるよ！」

柊人「嘘つけて。」

あすみ「嘘ついてるのは、柊人じゃん。」

柊人「はあ？」

あすみ「柊人はさ、冷静な振りして逃げてるだけじゃん。」

柊人「なんだよ、さっきもさ。逃げてるってなんだよ？」

あすみ「全部コロナのせいにしたら楽だよ。でも、それってさ、戦う前

から諦めてると一緒じゃん！」

柊人「じゃあ、何か？俺たちが騒げばどうにかなるのか？どうせ騒いだところで意味ないんだよ！それで、文化祭普通にやれるようになるのか？高校総体も甲子園も、やれるようになるのかよ！？なんねえだろ！だからさ、もう諦めるしかないんだって！」

ひかり「あんたが諦めてどうすんのよ。」

柊人「…」

ひかり「生徒会長でしょうが。」

柊人「……」

ひかり「あんたも、あんたも、あんたも、生徒会が諦めたらどうすんの、アンタら選挙で選ばれたんでしょ？私らの声を代弁してくれる人たちでしょ？アンタたちが諦めたら、私たちの声はどうなるの？」

一同「…」。

ひかり 自分のスマートフォンを取りに行き、その場で電話する

ひかり「もしもし、」

橘「あの、どうなった？」

ひかり「さっきのは終わったけど、別の問題が発生してる。」

杉森「何？」

ひかり「ねえ、言っちゃって。うちらがどう考えてるか。」

奈良「え？文化祭のプランの話？」

ひかり「そう。」

奈良「いいけど。うちらはさ、マスクに穴開けてミニちゃん唇の絵とか描いてさ、それで吹くんだったら周りの人に迷惑かけないかなあって。で、文化センターだろうが、校内祭だろうがマーチン

グヤリたいって話してんの。やっぱさ、音楽って人に元気を与えるわけじゃん？だからさ、ゼツタイやりたいんだよね。何とか30分だけでいいからさ、時間ももらえないかな？その交渉をしたかったんだよね。」

杉森「うちらは、毎年お点前を披露してたけど、今年はコロナの影響で無理じゃない？だからさ、華道の展示をしたいって思ってるの。花って可憐で儂いものだけど、でも、どんな逆境でも立ち上がる強さがあるのね。だから、私たちはそういう作品をみんなに見てもらいたいって思ってるの。」

橘「もし、校内祭だったら動画コンテンツっていうのもアリかなあって。もちろん、文化センターならダンスだけど、マスクもさみんなでおしゃれなやつ作ればさ、逆にかっこよくない！？って思うわけ、たぶんこれ逃したらもうクラスが一致団結して何かするってもう一生ないかもしれないわけじゃん？卒業するときさ、ああこのクラスでよかったっていう思い出ないとき、泣けないよね！だからさ、やる方法はいくらでもあるんだよ。」

ひかり「演劇は場所を選ばない。照明がなきゃできない、音響がないとできない、ステージじゃないとできないじゃなく、体一つあればできるのが演劇。そして、演劇は人と人、世界と世界をつなぐの。一人じゃないって。戦ってるのは一人じゃないって。私はそのいうメッセージを込めた芝居をしたい。できればマスクは外したいし、距離も撤廃してほしい。でも、それを逆手にとった芝居すんのもアリかなって。さっき思ったんだよね。だから、諦めないでよ。私たちの声を届けてよ。」

柊人「みんな…」

奈良「じゃあ、とりあえず、言いたいことは伝えたから。」

橘「頑張れよ！柊人！」

杉森「では、私たちはこれで。」

リモート電話切れる

ひかり「私たちは諦めてません。発表の場を、表現の場をなくしたくないから。私たちは戦います。だからコロナでも、いろいろ出来るって事、証明しましょう？ね？」

柊人「……逃げちゃだめだ。」

ひかり「え？」

柊人「逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ！逃げちゃだめだ！！」

樹「柊人……」

柊人「……こんなに、みんな考えてくれてるのに、俺たち、生徒会が諦めたらダメだよな。あー何やってんだ俺！！」

一同「……。」

萌瑛乃「……集計しちゃわない？」

樹「萌瑛乃さん？」

ひかり「……中止よりも、やりたいって声上回っちゃうかもしれませんよ。」

萌瑛乃「……いいの。それで。……いいの。」

あすみ「何の話？」

萌瑛乃「何でもない。」

ひかり「手伝ってもいいですか？」

柊人「ありがとう。助かるよ。」

全員で集計作業をする

柊人「出た。文化センター103、校内祭257、中止95。」

萌瑛乃「3年生以外に中止に入れたのは10人くらいってことか。」

ひかり「これがみんなの声ってことですね。」

あすみ「スポーツ大会は？」

樹「7月に規模縮小1日で開催が301、9月に運動会とドッキングで1日開催が127、中止29。」

萌瑛乃「どうするの？」

柊人「……決まってるんじゃない。先生方と全面戦争だよ。」

あすみ「なんか燃えてきた。」

萌瑛乃「そうだよ、やる前から諦めちゃだめだよ。ね？藤林君。」

樹「もつ萌瑛乃さん……！」

柊人「よおし！じゃあ、なんかアイデアある人！」

樹「はい！例えばだけどき、生徒会主導で全校で着られるデザインのTシャツ作るのどうかな？」

あすみ「それなー！いいかも！」

柊人「それ！デザイン募集しようぜ！」

ひかり「はい！提案ですけど、文化祭でデザイン募集して展示ってどうでしょう？美術部とか、書道部とかそういうセンスある人たちにも作品に応募してもらって、投票で決めるとか！」

萌瑛乃「やっぱさ、1位にはちゃんと賞品だそうよ。表彰してさ。」

樹「文化祭ポスターとテーマ毎年、表彰してるじゃん？それと一緒にするってのは？」

柊人「いいねえ！さすが冬月！」

女三人「フツツキ？」

樹「え？あーその、あー別にいいじゃん！なんでも！」

あすみ「えー気になる！ってかさ、うちいらない間に何あったの？」

柊人「んーそれは言ってもいいけど、樹君の許可が必要かなあ。」

樹「おい、やめろよ！」

柊人「再現してやろうか？」

樹「おい！やめろって！」

あすみ「みたいみたい！」

ひかり「桜庭さんの回想シーンは私が、」

萌瑛乃「ちよっと！待って！」

柊人「よっさすが演劇部！」

樹「いいから、やめろって！！」

柊人「こーいーしちゃったんだ、たぶん、きついでないでしょー」

樹「しゅうとおおお！」

ひかり「ああ、もう！危ないですよ！」

萌瑛乃「二人とも！」

あすみ「なんだか知んないけど、やれやれー！」

樹「もー勘弁してよー」

幕——しかし、再び幕が上がる

そこには無機質な仮面をつけた者達が座っている

パジャマ姿の柊人も座っている

仮面1「(以下、アンケート用紙をばらまきながら) 7月1日、県立高校

に通う男子高校生一人が新型コロナウイルスに感染」

仮面2「感染経路は不明」

仮面3「とされているが、一部では親族の結婚式のため、東京都内へ宿

泊したとの情報もある。」

仮面4「男子生徒が通う県立高校は2週間の臨時休校となり、」

仮面2「文化祭は中止」

仮面1「スポーツ大会も中止。」

仮面3「予定されていた代替試合もすべて出場停止となった。」

仮面2「幸い、本校生徒に濃厚接触者はいなかった。」

仮面1「何もかも普通だった。彼を除いて。」

仮面4「なんでコロナになった？」

全員「なんで、コロナになった？」

柊人「全部、全部、俺のせいだ……」

鳴り止まない電話

電話口に怒号が飛び交い、必死に対応する人たち

柊人「うわあああ！」

仮面2「生徒会長のせいじゃないです。」

仮面1「横山君のせいじゃないよ。」

仮面3「柊人のせいじゃない。」

仮面4「バカ柊人。あんたのせいなわけないじゃん。」

柊人「チクシヨウ！なんでだよ、なんで、こんなに苦しいんだよ！」

仮面2「コロナにかかったお前が悪い。」

仮面1「お前を匿名の名のもとに曝し、処刑する奴らが悪い」

仮面3「奴らのせいにして、適当なことを言う社会が悪い」

仮面4「社会を批判するばかりで何もしない大人が悪い。」

柊人「全部コロナが悪いんだ！全部コロナのせいだよな！そうだよな！」

仮面「……」

柊人「……え？」

仮面「後ろの正面、だあれ」

仮面 柊人を囲むように迫ってくる

柊人 絶望し、泣き喚くが、強く咳き込む

幕